薩摩藩出身ではない薩摩藩士

主任学芸専門員　新福　大健

薩摩藩では、ある程度柔軟に藩外の人物も人材登用が行われていた。幕末、集成館事業では大和国出身の石河確太郎が、薩摩藩の洋学校である開成所には土佐国出身の中浜万次郎らが登用されたことは知られている。

古くは戦国末期に島津氏が九州制覇をした際に服属した各地の武士の中にも、島津氏が豊臣秀吉に降伏後も南九州まで従った者がいたとされる。また、江戸初期の慶長15(1610)年に亡くなった江夏友賢は、元は黄友賢という中国人で、易(占い)で島津氏に仕えた人物であった。

江戸時代中期の8代藩主・島津重豪は、博物学に強い関心を示し、鳥に関する役職を設置し、鳥の飼い方を解説した『鳥賞案子』を著した比野勘六を御鳥方にするなど、人材登用もした。重豪も藩外の者を登用している。

重豪晩年の文政11(1828)年から家老を務めた人物に、猪飼尚敏(央)がいる。藩の上級武士の家に関する「薩陽武鑑」には猪飼家の冒頭に、一橋徳川家の徳川斉敦の用人である猪飼茂左衛門の二男、とある。斉敦の娘・英姫は、11代藩主になる島津斉彬の正室であり、斉敦の兄は11代将軍・徳川家斉である。「猪飼央役職中文書(自寛政十二年五月至弘化二年五月)全」(東京大学史料編纂所蔵)には、8歳の寛政12(1800)年から重豪の小姓として仕え始めたとある。重豪は、一橋家、ひいては将軍家斉との連絡役としても猪飼を登用したと考えられる。

また、重豪の晩年、大坂藩邸で財政難に対処した新納時升の『九郎談』には、菊池東原という幕府の旗本が登場する。『寛政重修諸家譜』には、旗本の菊池氏の項に菊池武方という人物がおり、この人物が東原に当たるとみられる。また『同諸家譜』には、武方の姉妹が一橋家や尾張徳川家に仕えているとの記述もある。

新納は、菊池は郢曲(歌謡)で重豪に登用されたと述べる一方、菊池を「老中参政其他時の権門の方抔出入りし多く知人あり」と評している。つまり重豪は菊池を、幕府や大名家との根回し、連絡役として用いたと考えられる。

時代は下り、重豪の曾孫に当たる斉彬の側近として仕えた人物に、山田為正という人物がいる。為正が書いた「山田為正参府御供日記」(個人蔵・黎明館保管)は、斉彬の参勤交代の供として江戸－鹿児島間の交通の様子を描いた史料として知られる。

為正の祖父に当たる山田為種に関する「山田為種明細日記」(個人蔵・黎明館保管)によると、為種は宝暦6(1756)年に鷹匠として藩主重豪から出入りを命じられ、天明元(1781)年に五人扶持を与えられ、正式な薩摩藩士になった。宝暦6年は、重豪は江戸にいるため、為種は江戸出身で、江戸藩邸で抱えられたと考えられる。

鷹匠の為種が登用された理由は何か。それは、徳川将軍家が鷹狩(放鷹)を盛んに行ったことで、鷹狩が権威づけられていたことがある。『旧記雑録追録』には、将軍が鷹狩で得た雲雀や鶴などの獲物を、藩主へ下賜した記述が毎年のように出てくる。重豪は鹿児島城下西田町郊外の尾畔仮屋(別邸)を、安永6(1777)年に鷹匠頭の管理とした。これは、鷹狩の場所に設定したものと考えられる。尾畔は『三国名勝図会』で風光明媚な地として紹介されている。将軍が盛んに行う鷹狩を、大名も倣うことで将軍の歓心を買い、幕府との関係を良好に保とうとしたことが窺われる。

重豪以降、島津家は重豪の娘・茂姫が将軍家斉の御台所(正室)になり、9代藩主・島津斉宣の娘・郁姫が五摂家の近衛忠熙の正室に、さらに幕府の要職を務める譜代大名との婚姻を次々に実現するなど、徳川家や大名家などと縁組したことはよく知られる。

これに加えて人材登用でも幕府などとの関係を良好に保つため、鷹狩も含めた関係構築が行われていたことが分かる。この人脈を含む関係構築は、情報を収集し、藩にとって有利な状況を作るための働きかけに活かされていったものと考えられる。

＜参考文献＞
細川博昭『大江戸飼い鳥草紙』吉川弘文館、2006年
根崎光男『犬と鷹の江戸時代』吉川弘文館、2016年
大山麟五郎校勘『九郎談(中)』鹿児島県立図書館奄美分館、1974年

「山田為種明細日記」の冒頭部分

館長あいさつ

館長　鎮寺　裕人

この7月から館長に就任しました。職員の皆さんと一緒になって、これまで以上に皆様に愛され親しんでいただける黎明館になるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

残念ながら、新型コロナウイルスの感染拡大はとどまるところを知らず、本県におきましても県有施設の利用制限を行わざるを得なくなり、私どもの黎明館も8月半ばから約1か月半にわたり実質休館状態となりました。

黎明館のエントランスは人の気配もなく灯りも消え真っ暗となり、7月には夏休みの子供達の笑い声やはしゃぐ声がこだましていたのに、今は全く寂しい限りの光景となりました。来館されるお客様あってこその黎明館だという思いを改めて強くしたところであります。

そのような中ではありますが、再開に向けて黎明館本来の姿を取り戻せるよう準備が進められてきました。10月1日からは本年の企画特別展「ほこらしゃ奄美～海と山の織りなすシマの世界～」が始まりました。私にとって、奄美は仕事の関係で通算5年間過ごした思い出の地であります。美しい自然の下で、シマ唄を聴きながら黒糖焼酎を傾け、おもてなしの心に溢れた地元の方々と楽しい時間を過ごしました。今回の特別展は、奄美に関する貴重な資料を通して文化の源流に迫る展覧会です。開催に向けて職員一同、一生懸命に取り組んでまいりました。多くの皆様がまた黎明館に足を運んでいただける日が一日でも早くくることを心から願っております。

黎明館のフカボリ③

学芸員のオシゴト　展示替え

博物館の大事な役割の一つに、資料を後世に伝え、残すという「収集・保存」の機能があります。黎明館は、これまで多くの方々からの寄贈、寄託等により、県内外の歴史、民俗、美術・工芸に関する資料を収集し、現在では18万点を超える資料を収蔵しています。

一方、博物館には、「展示」によって資料の持つ魅力を伝えるという役割もあります。黎明館では、常設展示、企画展、企画特別展などで、資料を通して見えてくる歴史や文化について発信しています。このうち、常設展示は展示テーマが決まっているため、通年同じ資料が展示されることが多いのですが、資料によっては、長期間の展示により光による焼けや退色等が心配されるものもあります。そのような資料は、展示期間を限って、収蔵庫に保管されている他の資料と入れ替えを行ないます。

常設展示では、約3500点の資料・作品を展示していますが、これらは黎明館の収蔵資料のわずか2%程度で、残る多くの資料は収蔵庫で保管されています。膨大な数の資料の中から展示する資料を選ぶのは簡単ではありませんが、「この魅力的な資料をもっとみんなに見てもらいたい」という思いで、各分野の担当者は資料を選んでいます。

展示替えの様子

大がかりな展示替えは、休館日に行います。資料の位置や角度、照度などに気を配りながら、展示します。

「展示替えセット」

展示する資料に応じて、様々な展示用具を使い分けます。

#黎明館の展示替え情報

展示替えを行った際は、黎明館公式Twitter・Facebookにてお知らせしています。是非、新たに展示されたすてきな一品を見に常設展示にお越しください。